

私が花であった頃 ラブカディオ・ハーソ



私が花であった頃

私が花であった頃

ラフカディオ・ハーン 作

私はかつて、花でした――大きくて美しい花でした。私の花の杯は、雪のように白くて、馥郁とした香りに満たされていて、その上に止まる、虹の羽をした虫たちを、酔わせました。私を見る人たちには、昔のローマの皇帝たちの、宴席に使われた、没薬を混ぜた、ワインカップの美しさを、思い起こさせました。

蜜蜂は、光まばゆい夏の間、私に歌いつづけました。風は、暑熱の中で、私を愛撫しました。夜には、露の精が、私の白い花の杯を満たしました。象の耳よりも大きな葉をつけた、巨大な植物が、生あるエメラルドのような、緑の天蓋で、私を覆っていました。

遠くには、神秘的な、絶え間ない讃歌を歌う、せせらぎが聞こえ、無数の鳥が囀っていました。夜には、私は、繻子のように、つやつやした花卉の間から、星々の果てしない行進を見つめました。そして、昼になると、私は黄金色の花芯を、絶えず日輪のまなこへと向けました。

胸に宝玉を散りばめた、ハチドリが、日の出の方角から飛んできて、私のそばに巣を作り、私の花の杯に残っている、香りたかい露を飲みました。そして未知の国の不思議なことどもを、私に歌って聞かせました。――魔法使いの花園にだけ咲く、黒い薔薇とか、南国の月夜にのみ、花芯を開く、その香りが死をもたらす、お化けユリとかの。

* * *

私の緑の命の糸は、断ち切られて、彼女の髪に、私は挿されました。私は、死の緩やかな苦悶を感じませんでした。夜のように漆黒の、つややかな髪の中に、捕らえられ、星のように輝く、蛍のようには。私の命の香りが、彼女の血に混じり、彼女の密かな心房に入るのを、私は感じました。私が花に過ぎないのを、私は悲しみました。

* * *

その晩、私たちは一緒に死にました。彼女がどのように死んだのか、私は知りません。私は、彼女と共に、永遠の眠りにつくことを、願っていたのです。けれども、不気味な風が、窓から吹き寄せ、私のしおれた花卉を引き裂き、枕元に白いむくろを、散らせたのです。しかし、私の魂は、かすかな香りのように、まだ、静かな部屋にさまよい、蝋燭の炎のあたりに、浮かんでいました。

* * *

私とは種類の違う、ほかの花々は、彼女の安らぎの所の、上方に、咲きつづけています。それらの生き生きとした、花卉の中には、彼女の血が生きています。それらに、香りを与えているのは、彼女の息です。それらの、透明な、緑の葉脈に、命を与えているのは、彼女の生命です。しかし、夜の魔法の時間には、慈悲深い露の精が現われ、夏の日の終わりを悲しみます。そして、私を運びあげ、彼女の墓にしたたる、水晶の涙に、私を溶け入らせてくれるのです。

原題 : When I was a Flower (from *Fantastics*)

翻訳 : shuh kai 2013